

# まちの宝物(7) 上関大橋

上関町の象徴として、誰もが思い浮かべるのが「上関大橋」です。室津半島と長島を結ぶ上関大橋は、昭和44年6月に完成し、開通式には町民が総出でお祝いをしました。橋の完成を記念して作られた「上関大橋音頭」は、盆踊りや運動会で踊られて、今でも多くの町民に親しまれています。

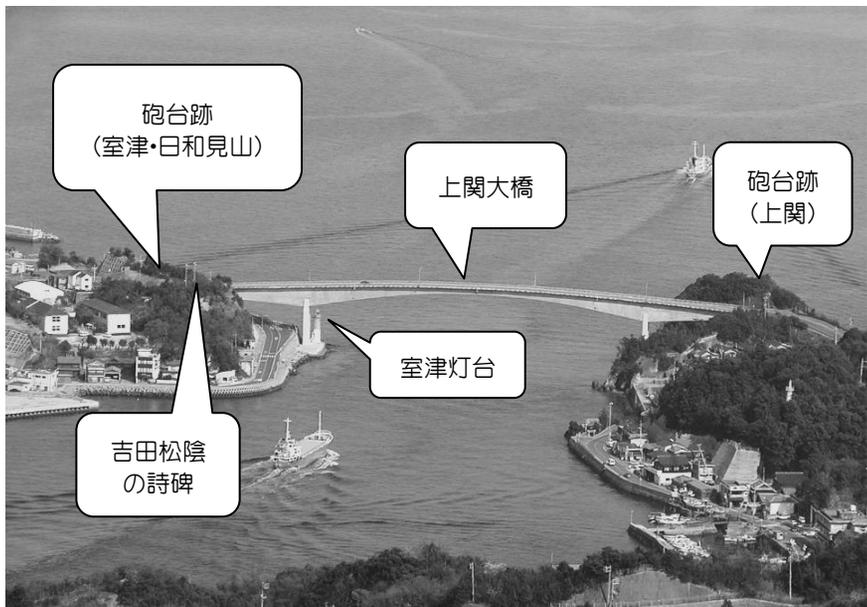
上関大橋の開通によって、長島は本土とつながり、その生活は大きく変化しました。上関町の交通の大動脈として、橋は無くしてはならない存在になっています。

上関大橋のかかる上関海峡の幅は170メートルで、1日におよそ千隻の船が通過するといわれています。上関海峡にかかる上関大橋の姿は、町民だけでなく、多くの写真家や画家にも愛され、風光明媚な上関町の中でも、人気のスポットといえるでしょう。現在は改修工事中で、この数年間は工事用のネットがかけられたままですが、早く工事が完了し、再びその美しい姿を見せて欲しいものです。

橋には歩道もあり、橋の上から眺める風景も、とても素晴らしく、観光で訪れた方は、車で渡るだけでなく、ぜひ歩いて渡って欲しい



上関大橋



と思います。橋の高さは海上約23メートルです。橋の上から真下の海を見下ろすのは、ちょっと勇気と注意が必要ですが、海峡を通過する船を真上から見ることができて、普段は味わえない感覚を体験できます。

## ◎砲台跡

1845年に長州藩が海峡防備のために、上関海峡を挟んで、室津側(日和見山)に2基、上関側に3基の砲台を設置しました。1866年(慶応2年)6月6日に幕府軍の艦船「富士山丸」が室津に砲弾を撃ち込み、四境戦争の火ぶたが切られたと言われています。現在はどちらの砲台跡も海を見おろせる小さな公園になっています。



上関大橋から定期船を見おろす

## ◎吉田松陰の詩碑

明治維新に大きな影響を及ぼした幕末の志士・吉田松陰は、1853年(嘉永6年)2月に江戸遊学の途中で室津に立ち寄り、室津の日和見山の砲台を視察しました。同年10月には、ロシアの軍艦に乗り込むため、江戸から長崎に向かう途中で、再び室津に立ち寄りました。上関大橋の室津側のつけ根にある詩碑には、この10月の寄港時に詠んだ詩が刻まれています。

## ※吉田松陰の詩の意味

故郷に帰っている夢をみていた時、船頭が「上関についたぞ」と大声を出したの目が覚め涙でぐっしょり濡れていた。夢が夢だったので船室から起き出るのが



吉田松陰の詩碑



砲台跡(写真上が上関側、下が室津側)

遅かったといって怪しまないでほしい。それに、今晩は室津に泊まって明日は九州。これで長州の土地も見おさめになる。ふるさとの山に未練がないといえはうそになるが、くいを捨てたのだから故郷の山を見るのは忍びないんだ辛くって。

## ◎室津灯台

上関大橋の室津側のたもとに建つ、高さ15メートルの白い灯台です。初点灯は昭和11年6月1日ですから、上関大橋の完成よりも33年前(今から77年前)からここに建っています。上関大橋と共に、上関海峡のシンボルの存在です。



室津灯台

## ◎懐かしい写真

上関大橋開通式の日。橋の上は人で埋め尽くされています。



→ 上関大橋のない時代の上関海峡。

◎「わいわいタイムス」7月号は7月7日(日)発行予定です。